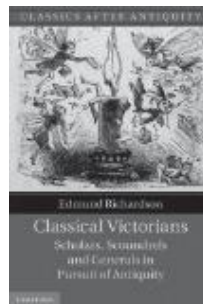


## 書評

Edmund Richardson, *Classical Victorians: Scholars, Scoundrels and Generals in Pursuit of Antiquity* (Cambridge: Cambridge University Press, 2013)

唐戸 信嘉



著者 Edmund Richardson はダラム大学に所属する古典学の若手の研究者で、本書は彼の最初の著作であると同時に、ケンブリッジ大学出版が“Classics after Antiquity” という題の下に刊行を開始した叢書の第一巻でもある。このシリーズの眼目は、編者達が序文で述べるように、古代ギリシアやローマの古典文学が後世の時代においてどのように受容され、影響を及ぼして来たのかを再考する点にあり、本書はヴィクトリア朝という時代設定のなかでこの主題を掘り下げる任を負っている。19 世紀における古典学の役割と表象を精査した研究としては、Richard Jenkyns の *The Victorians and Ancient Greece* (1980) および Frank Turner の *The Greek Heritage in Victorian Britain* (1981) がすでにあり、現在でもしばしば引用され、この方面の研究として依然として重要な位置を占めている。Richardson の狙いは Jenkyns や Turner とは異なる資料を用い、ヴィクトリア朝の古典受容の新しい様相を浮き彫りにする点にある。

まず第 1 章で、著者は先行研究を踏まえ、ヴィクトリア朝文化が古典世界—特に古代ギリシア—に熱中した時代であったことを顧みつつ、その熱狂の中心にはしかし、ある不安定さ、不確かさ (“uncertainty”)、流砂 (“quicksand”) のような危うさがあると指摘する。それは、歴史そのものが孕む存在論的な不確実性であり、そうした過去との関係の危うさを、ヴィクトリア朝の古典学にまつわる言説は図らずも暴露していると言う。

第 2 章では、ヴィクトリア朝期の古典学の伝統と権威を称揚した人物達、Benjamin Jowett、William Ewart Gladstone、Oscar Browning らの煌びやかな人生の陰に、ホメロス翻訳者で貧困とアルコール中毒のうちに早世

した Theodore Buckley や、同じく古典文学の翻訳者でグラマースクールの校長であったが、妻を殺害して終身刑となった John Selby Watson のような人々がいた事実に目を向けている。この対比は、双方共に古典学に関わりつつも様々な人生の明暗があったという事実以上の意味を持つ。なぜなら一著者が繰り返し強調するように一ヴィクトリア朝のイギリスには古典学教育にまつわるイデオロギーがあり、それは「古典学を修める者はどの分野でも成功する」というものであったからである。古典学の知識とは何よりも、完全な紳士を作り上げるその重要な鋳型であり、従ってその習得はあらゆる道の扉を開く「銀の鍵」(“the silver key”) と信じられた。ここでいう成功とは金銭的な成功をも無論含意している。そしてこのイデオロギーを補強したのは、貧しい生まれでありながら、独学で古典学を学び、最終的に出世した人々の成功譚であった。しかしこうしたイデオロギーは、それが建前としてのイデオロギーである限りひとつの神話に過ぎず、著者が豊富な資料で例証するように、大学への入学には社会的な帰属が概して重要視され、卒業後の進路においてもコネクションが何よりも物を言った。Buckley や Watson といった人々は、古典学を修めつつも出世コースからは外れ、貧窮のうちに暮らすことを強いられ、凄惨な最期を迎えている。彼らを見舞った悲劇は、あるいは例外的なものであったかも知れないが、当時グラマースクールで古典学を教えていた教師達の身分や収入は概して低く、上流階級の女性との結婚などは到底望みうるものではなかった。ヴィクトリア朝における最高の教育のひとつと崇められた古典学であったが、それを修めた者が必ず「銀の鍵」を手にしたわけではないのである。何より皮肉なことに、アカデミズムの外側の世界、ヴィクトリア朝の世間においては、このイデオロギーの虚構性は早くから見抜かれ、時に冷笑の的になっていた。古典学が内包する光と陰、栄光と空疎の相反する二つの位相、それが著者の指摘する第一の危うさである。

第3章では、クリミア戦争と古代ギリシアの切り離しがたい関係に焦点が当てられている。ウィーン体制を揺るがすこの大戦にイギリスが参加した主たる理由は、支配地域の拡大とそれにより獲得される利権にあったわけだが、戦争直後のイギリス軍は、自分たちをホメロスに登場するギリシアの英雄に見立て、戦闘参加を正当化する巧妙なプロパガンダとして用

いた。マスコミもこれに追従し、戦況を伝える記事にも古代ギリシアへの言及が目立ち始め、現代と古代のイメージは瞬く間に奇妙な混濁を呈するに至る。こうした状況を惹起したのは、戦場がギリシア神話に登場する土地であったことが大きい。何より、当時のクリミア半島には古代ギリシアの遺跡と遺物が数多く手付かずのまま残存していた。著者はここで、クリミアの遺物の発掘に携わった二人の人物、軍医 Duncan McPherson と相棒 Robert Westmacott の活躍を紹介している。彼らは、軍務で当地に赴きつつも、古代世界への憧れから率先して遺跡や遺物の保存に情熱を傾け、発掘品をイギリスへ輸送する責任者に任命された人物である。McPhersonは帰国後 *Antiquities of Kerch, and Researches in the Cimmerian Bosphorus* (1857) を出版し、この考古学的発掘の成果を報告することになる。しかし、開戦当初は古代ギリシアへの追憶に彩られたクリミア戦争であったが、やがて戦況が思わしくなくなると古代ギリシアへの言及と古代的修辭はたちまち姿を消す。イギリス国内の世論は手の平を返したように、自らを古代の英雄に擬した軍人たちを嘲笑し始め、ギリシア時代の猛勇のイメージは野蛮さと非道のそれに反転する。古代ギリシアにまつわる象徴の価値は急激な下落を見せるのである。ここにも、古典世界とヴィクトリア朝社会の危うく不安定な関係が露呈していると著者は指摘する。第3章の後半には、そうした風潮の中、古代世界への熱狂を依然として失わず、むしろ現行の社会体制を覆し、社会改良のための有力なモデルとして古代ギリシア世界を称揚した作家 Robert Barnabas Brough への言及もある。だが Brough が渾身の力で書き上げた戯曲 *Media, or The Best of Mothers, with a Brute of Husband* (1856) は、観客の無理解と冷ややかな嘲笑によって迎えられ、数

年後に彼は 32 歳という若さで貧困のうちに死去するのである。もし彼が裏切られたという印象を抱いたとするならば、それは彼の作品を冷遇した観客に対してというよりも、古典世界を祀り上げた教育界に対して向けられていたに違いない。

最終章である第4章で取り上げられているのは、Constantine Simonides と Samuel Butler という、出自も経歴も全く異なる二人の人物である。Simonides は、1820年にギリシアに生まれ、1890年にエジプトで没した古文書のブローカーで、かつ稀代の贋作者である。彼の古代世界への深い

造詣は専門家を凌ぐほどであり、彼が精巧に偽造した古代ギリシアやビザンチン時代の古文書をつかまされた人々は数多い。彼の悪名を一躍広く欧州に轟かせた出来事は、何と云ってもドイツの聖書学者 Tischendorf が 1844 年にシナイ山の修道院で発見した新約聖書写本—現在シナイ写本 (Codex Sinaiticus) と呼ばれているもの—を、1862 年になって自らが若き日に偽造した作品であると公に発表したことだろう。Simonides のこの告白の意図の詳細は不明であるが、彼が以前にも福音書の精巧な贋作を偽造していた事実から、この告白が大きな物議を呼んだことは無論である。最終的に、司書で古文書学者の Henry Bradshaw が Simonides の主張を退けることでこの騒動は一応の決着を見るが、Richardson は歴史の不確定性を暴露し、世に知らしめた重要な出来事としてこの騒動を位置づけている。そしてこれと同様に、歴史の存在論的危うさを暴露したテキストとして、著者は Butler の *The Authoress of the Odyssey* も挙げている。Butler はこの論考で、『オデュッセイア』の著者は紀元前 7 世紀のシチリアの女性であるとし、この作品の舞台をシチリア島北西端の港町トラパニ周辺と同定する新奇な仮説を打ち出している。古典学者の Jane Harrison らはこの説を荒唐無稽として一笑に付したが、Butler のこのテキストにおける戦略は、既存の古典学の研究法に異論を唱える点にあったと著者は推測する。つまり、伝承史料に積極的な価値を認め、そこから自由に古代世界に想像力を飛翔させること、客観的なデータと推論の蓄積により歴史は近づき得るという従来のドクサを捨て、現在と過去の不安定な関係そのものを楽しむことが提起されていると論じる。

結論として著者は、ヴィクトリア朝社会において、過去と現在の連続性の神話は崩壊の兆しを見せ始めたと総括する。歴史的連続性は、何よりも西洋社会の背骨たる教会の権威を決定づけていたその中心概念であったわけであるが、その衰退は多方面に影響を及ぼし、古典学もまたその余波を被る運命にあった。過去はもはや客観的事実ではなく、終わりなく形を変える無定形の表象であることが自覚されつつあった—そのように、本書は締め括っている。

最後に、私自身の率直な感想と印象を述べておきたい。本書の最大の魅力は、流麗な文体とその卓抜した語りの力にある。その点、ヴィクトリア

朝を専門とする文学研究者や文化研究者でなくとも、楽しみながら最後まで読み通せると保証できると思う。しかしその分、結論へと向う後半のまとめ方にはやや物足りない印象が残った。ヴィクトリア朝における歴史表象に、客観性の喪失や解読不可能性を読みこむ試みは、すでに 90 年代から現れている。更にそれ以前から、歴史叙述をテキスト的次元に還元する相対主義が流行している。我々には、Richardson による過去とは迷宮 (“labyrinthine”) であるという文句を、既知感を覚えずに読むことは難しい。この著作が “Classics after Antiquity” というシリーズの一冊であることはすでに書いたが、序文で編者は「分厚い記述」 (“thicker account”) を方針としているとも述べていた。この言葉は人類学者 Clifford Geertz の提起した “thick description” を踏まえていると思われるが、Richardson の論はその方針を遵守し、ヴィクトリア朝における「古代」の問題を厚みのあるコンテキストの中で検討している。その分、尚一層、結論は既存の解釈や言葉遣いから更に一步踏み込んだものを期待してしまう。例えば、歴史学の分野では、歴史の認識の不確実性がヨーロッパで意識され出したのは 17 世紀に遡るとというのが最新の定説であるが、19 世紀ヴィクトリア朝社会はどのような段階にあるのか。また、19 世紀には考古学や人類学が強く古典学に影響を与えるが、それはどのような意味を持ったのか。そうした問題にも本書が議論を進めることを期待してしまうのは、一人私ばかりではないはずである。